教室不適応の生徒に対応する居場所の機能

川崎夫佐子　　松本市立旭町中学校
高橋　知音　　教育科学講座

キーワード：保健室，相談室，特別支援学級，居場所，中学生

1．はじめに

1992年，文部省学校不適応対策調査研究協力者会議において「不登校問題について－児童生徒の『心の居場所づくり』をめざして」と題する報告書の中で「学校が子どもにとって自己の存在感を実感でき精神的に安心できる場所（心の居場所）となることが大切である」と指摘され（田中，2001），これにより，子どもの居場所づくりが注目され始めた。

学校外では不適応の生徒に対応したフリースクールや適応指導教室などの「居場所」とともに，近年では地域構成員である家庭，学校，住民，企業，民間団体，関係機関が一体となって児童生徒の健全育成に向けたネットワークづくり事業（国立教育政策研究所生徒指導研究センター，2007）の取り組みが行われたり，文部科学省が実施している地域子ども教室推進事業として，地域住民における「子どもの居場所づくり」の取り組みが注目されたりしている。校内については杉浦（1992）が，心の居場所としての保健室の2つの働きとして「不登校になる前の歯止め（防波堤）」と「再登校から学級復帰への前段階」を明らかにした。また保健室ばかりでなく，不登校生徒が再登校する際，家庭や校外の適応教室から学級へ復帰するケースは少数で，別室登校というステップを踏むケースが多いため，別室登校（校内の空き教室を利用してカウンセリングマインドを持った相談係の教員や当該学年の教員が対応するもの）や特別支援学級などが段階的な「居場所」となっている。

では，そうした校内の居場所に関する研究はどのように行われてきているだろうか。栗谷ら（2003）はそこでの養護教諭の援助を，養護教諭からの聞き取り調査から，7つの保健室の特性と援助技術にまとめている。こうした実証的研究に基づいた「居場所づくり」の研究もわずかだがされているが，「居場所」の構成要素の分析，発達変化，分類別での比較分析などが主流であり，個人を取り巻く複数の「居場所」の総合的な分析，不登校生徒が利用する居場所の比較など「居場所」を選択する要因の分析，メンタルヘルスとの関係，などはされていないことが多く課題としてあげられている（杉本・庄司，2007）。

そこで本研究では，校内にある不適応の生徒に対応した3カ所の居場所において，その心理的機能を生徒の聞き取りから要因分析し，心の居場所としての今後の望ましいあり方について検討する。

2．研究目的

松本市A中学校において学級不適応の生徒に対応する3カ所の居場所に焦点をあて，生徒にとってそれぞれの環境がどのような心理的な意味合いをもっているのか，生徒からの聞き取り調査から明らかにする。その上で，期待されるそれぞれの居場所の役割と，効率的な活用のための要件を考察する。

3．方法

(1) 調査期間

平成19年1月。

(2) 調査対象者

別室登校を経験した在校生，卒業生 11 名（13～18 歳・女子 10 名，男子 1 名）。保健室利用経験者 10 名，相談室利用経験者 10 名，特別支援学級利用経験者 5 名（内 5 名が複数の居場所を利用）。

(3) 聞き取り調査の方法

半構造化面接による聞き取りを 20～60 分，本人の許可を得て筆記した。

(4) 調査内容

別室登校にいたる状況およびその場所での感情，考え，出来事。

(5) 分析方法

聞き取り内容を逐語録におこし分類した結果，抽出されたラベルは 84 となった。居場所となっていた理由と生徒が感じた困惑について類似のラベルを集め，本質的意味を表題する作業によりカテゴリーにまとめた。

(6) A 中学校において学級不適応の生徒に対応した 3 カ所の居場所

① 保健室

授業中は保健室登校の生徒と教科担任に許可を得た生徒が混在していた。

② 相談室

利用規程の遵守というほどの強い制限はないので，休み時間なども気軽に訪れても良い場所であった。しかし，実際には自由来室活動の保健室とは異なり，援助ニーズの大きい生徒に対応した三次的援助サービス(石隈，1999)を意図した位置づけがされていた。女性の加配教員が相談兼相談学級担任として一日勤務し，数名の職員が時間割にそって数時間，教科学習などに対応していた。

③ 特別支援学級

他の 2 つとは異なり学校教育法第 75 条により開設されている学級だが，A 中では情緒障害児学級の担任の協力により相談室的要素も担っていた。教科は学年の時間数よりも少なめだが，担任を含め教科担任が中心となり授業を行っていた。授業形態は個別や少人数で対応し，時には理科実験なども取り入れ，学年の違う生徒を対象に工夫していた。多少ゆるみもあるが日課通りの生活が目標とされていた。

4．聞き取り調査結果

保健室に関する 10 人からの聞き取り結果を表 1 にまとめた。保健室登校を経験した 10 名の聞き取りからは，「先生がいたから登校した」という養護教諭との関係性が居心地を左右し「調子の悪い自分を出せる」「悩みを聴いてもらえる」といった養護教諭の被受容感が保健室にいる重要な理由になっていた。 養護教諭との関係性から保健室が「落ち着いた」「安心した」居場所となり，「自分が必要とされている」という実感を持つ生徒もいた。反面，保健室という物理的な箱の機能だけでなく，養護教諭の態度やそこに存在しているかいないかが，生徒の居心地に影響し「忙しそうで遠慮する」「先生がいないと空気が気まずい」というように，養護教諭の多忙さや不在が不安感を高めていた。また，登校しなくてはという思いから，保健室が学校と家庭との「中間みたいなところ」としての意味を持ち，再登校のワンクッションの場として，「行きやすさ」につながっていた。そして，人との交流の接点として「仲のいい人と会える」，他者に慣れる場という機能がある反面，半田（2001）のいう自由来室活動の場所として，特別な援助ニーズのある生徒と，短時間でもその空間に居場所を感じ学級へ戻っていく生徒が混在しているため，保健室登校の生徒は，人の出入りの多さに「人の目が気になる」「居てもいいのか」という居心地の悪さや「このまま学級へ行けないかもしれない」とい

う焦りを感じていた。

表１　保健室「養護教諭の受容感と行きやすさ」

	居場所となっていた理由	人数	生徒が感じた困惑	人数
保健室 聞き取り10名	**1. 養護教諭からの被受容感** （先生がいたから登校した）（先生から必要とされていた）（調子の悪い自分も出せた）（悩みを聴いてくれる人がいた）	7	**1.養護教諭からの被受容感不足** （忙しそう）（話を聴いて欲しい人が何人もいて遠慮する）	2
	2. 精神的安定 （学級より落ち着ける）（安心した）（現実逃避できた）	3	**2. 養護教諭不在の不安** （先生がいないと登校する場所がない）（先生がいなくなるとき空気が気まずくなった）（先輩が怖く感じた）	3
	3. 他者からの自由 （無理に仲間づくりをしなくてもいい）（知らない人が座っている空間がいい）	2	**3. 人の出入りの多さ** （休み時間に人が多く入ってくると一人になりたかった）（人の目が気になった）（同学年が入ってくるとイヤだった）	5
	4. 学校と関われる場所 （学校と関わりのもてる限られた場所）（家と教室の中間みたいなところ）（家と学校の途中）（同学年の仲のいい人と出会える場所）	3	**4. 学習の不安** （教えて欲しい教科の先生が来ない）	1
	5. 力を蓄えて教室復帰 （ずっといてはいけないと思いそれがバネになっていた）	1	**5. 教室へ戻れない焦り引け目** （このまま教室へ行けないかもしれない）（他の子は教室へ戻されるのに居てもいいのか）	2
	6. 行動範囲の拡がり・活動性 （先生に囲碁で勝つため）（ソルティオの完成）	2		

次に，相談室に関する10人からの聞き取り結果を表2にまとめた。

相談室登校を経験した10名は，保健室登校が安定して居場所を移した7名と，校外の適応指導教室（中間教室）から学校復帰した1名と，相談室を経験したけれど保健室に居場所を限定した2名であった。聞き取りからは，「静かで人があまり入ってこない」静的な環境での安全安心感や，「時間のゆるみ」から得られる居心地の良さを感じていた。「図書館・音楽の時間」という行動範囲や活動内容に拡がりが出てきたことや，「時間割の感覚を思い出した」ように，日課通りの生活に適応力を回復し，居場所の意味を見いだしている生徒もいた。またそこでの複数の職員との関わりについて「先生は頼りになり，適当に放っておいてくれた」ことや，抵抗感の強い学習について「自分のペースを尊重される」ことで，理解されているという実感を持っていた。また「事情が似た人が集まっている」安心感から，仲間意識を形成し，そのことが登校を継続する安定した動機づけとなっていた。そうした人との関わりを，安全な空間の中で少しずつ体験できることに，「登校が楽しくなった」と居心地の良さを感じた生徒がいる反面，「一人加わると関係が変わる」ことにトラブルを感じ，適応できない時期を過ごした生徒もいた。そして人との関わりに抵抗感や緊張感のある生徒は，「みんな一緒というムードがだめ」と感じ，「一人になれる囲い」の場を室内につくり，一人の居場所を求めていた。また，ほとんどの生徒が相談室を「特別な場所というイメージ」を持ち，「学級に馴染めない自分」と思われることに抵抗感を持ち，他者からの見られ方について警戒心が強いことがうかがえた。

表２　相談室「自分のペースを尊重される場所」

	居場所となっていた理由	人数	生徒が感じた困惑	人数
相談室　聞き取り10名	**1. 他者からの自由・精神的安定** （静かで人があまり入ってこない）（上級生との距離感がよかった）（一人になれる囲いがあった）（隔離したところで落ち着けた）	4	**1. 他者との関わりへの抵抗感** （仲間に入らなければならない感じが馴染めない）（みんな一緒というムードがだめ）	4
	2. 他者との情緒的な関係 （事情の似たもの同士）（仲の良い人ができて登校が楽しくなった）（数人の人間関係はあったけどグループがないからよかった）（中間教室より仲間意識があった）	6	**2. 他者との関係性のトラブル** （一人加わると，今までの関係が変わる）	2
	3. 行動の自由 （時間にゆるみがあった）（ゆっくりお茶ができた）	2	**3. 相談室への抵抗感** （学級に馴染めない人達の一人だと思われることが嫌だ） （相談室＝いじめられている，と思われそう）（特別な場所というイメージで人目が気になる）	9
	4. 先生からの被受容感 （学習は先生達が自分のペースを尊重してくれた）（他の先生と知り合いになれた）（先生は頼りになり適当に放っておいてくれた）（教室に戻ったとき相談室で知り合った先生が担任で良かった）	6	**4. 保健室からの距離感** （保健の先生からの親離れみたいで嫌だった）	1
	5. 校外の適応教室からの入り口 （中間教室とやっていることが同じだった）	1		
	6. 現実原則への自信 （時間割の感覚を思い出してなんとかやっていけると思った）	1		
	7. 学習保障 （勉強ができたことはよかった）	1		
	8. 行動範囲の拡がり・活動性 （図書館へ気軽に行けた）（音楽の時間に行けるようになった）（先生がイベントを色々考えてくれた）	2		

次に，特別支援学級に関する５人からの聞き取り結果を表３にまとめた。

表３　特別支援学級「学習の場としても重要な学級」

	居場所となっていた理由	人数	生徒が感じた困惑	人数
特別支援学級　聞き取り5名	**1. 他者との情緒的な関係** （少人数なのでグループがなくて苦労しない）	1	**1. 他者との関係性のトラブル** （相談室から人数が増えて関係がややこしくなった）（ケンカが増えた）	3
	2. 能力が発揮できる （勉強できることが良かった） （苦労だったけど３年で焦っていた） （このクラスの人に負けたくなかった）	3	**2. 学習への抵抗感** （勉強の時間が多くなって嫌だった）	3
	3. 複数の先生からの被受容感 （調子の悪いときは勉強も強制されない）（学校の先生達に自分が理解されているようでほっとした）（優しいお父さん）	2	**3. 現実原則への抵抗感** （学級の雰囲気と同じで最初は入れなかった）（硬いムードに最初は抵抗があった）	2
	4. 学級としての充実感・達成感 （担任の先生が色んなことにグイグイ巻き込んでいった）（友達関係の苦労もあったけど３年間の中で一番楽しかった）	2	**4. 女子の多さに抵抗感** （男子の少ないのが最初は抵抗があった）	1

聞き取り５名は保健室や相談室での再登校のサポートを経た後の学級復帰，または高校進学への最

終ステップの場としてこの学級を位置づけていた。そのなかで学習面のサポートが「勉強できることが良かった」と，皆から置き去りにされているような不安感を軽減させ「このクラスの人に負けたくない」という仲間同士のライバル心も高めていた。そうした学習を含めた学級づくりから「苦労も多かったけど一番楽しかった」と特別支援学級を居場所とした生活に充実感を持っていた。「教科の先生から学習が強制されない」「グイグイ巻き込むけど，優しいお父さんのような担任」と，教師との関係が深まり安心感を得ていた。反面，グループの苦労はないが，子ども同士の関わりが深くなってきた分，「ケンカが増えた」「人数が増えて関係がややこしくなった」ように対人関係に苦戦していた。また，学習や日課にあわせた生活に「学級と同じ雰囲気」を感じ，最初は折り合いをつけられずにいる生徒もいた。

5．考察および課題

学級以外の居場所に登校してくる生徒は，3 カ所の居場所の物理的な環境や人的資源，援助をどのようにとらえているか，居場所の共通性や固有性が確認された。次に，学校内において期待されるそれぞれの居場所の役割と，それに伴う効率的な活用のための要件を考察し，今後の課題をまとめる。

(1) 期待されるそれぞれの居場所の役割

田上（1999）は，援助計画を立てる際に重要になることは，不登校の子が環境と折り合っている場で《どのような意図で登校してくるか》《教師や他の生徒とどのような関係を持っているか》《登校の目標となる楽しさや達成感のある活動》の三つの側面がどうなっているかを整理することである，と述べている。三つの側面は冒頭でいう『心の居場所づくり』において「自己の存在の実感」と「安心できる場所」につながるものと考える。そこで調査結果をこの三つの側面から考察する。

《どのような意図で登校してくるか》という側面から 3 カ所の役割をみると，保健室に登校してくる生徒は，不登校の初期の段階の生徒が多いため，短時間でも登校しなくては，という思いから「学校と関わりのもてる限られた場所」として登校してくる。また，養護教諭との情緒的な関わりも登校の目的になっている。相談室は，保健室と同様に短時間でも登校したことでほっとしている面と，事情の同じ友達との関わりを楽しく感じて登校してくる面とがある。他の生徒と交流することで，相談室がしだいに自分の居場所として安定してきている。特別支援学級では，相談室と同様に友達との情緒的な関係を求める面と，学級の一員としての所属感，学習のため，高校進学のため，というはっきりとした登校目的が加わってくる。

それぞれの居場所には，生徒の感じている登校の目的に段階的なずれがある。このことによって，自分の行動を修正してそれぞれの居場所の環境と折り合う適応力を，ゆるやかに回復させていくことができると考える。また保健室という個の居場所と他の 2 つの居場所の行き来に自在性を持たせている。これは，中島・倉田（2004）が個人的居場所機能と社会的居場所機能という面から，一つの居場所のみでは心理的な機能をすべて充足することは困難である，と述べているように，機能の違う居場所を組み合わせることで，心理機能の充足をもたらしていくものと考える（図 1）。

《教師や他の生徒とどのような関係を持っているか》という側面から 3 カ所をみると，3 カ所に共通したカテゴリーは「教師からの被受容感」だった。自分のことを心配してくれ理解してくれる人がいる，という確信を持つことが居場所での現実生活を支えていることがわかる。

聞き取りからは，「心配してくれる」だけでなく「調子の悪い自分を出せる」「自分のペースを尊重してくれる」ことからの被受容感もあり，教師との情緒的な絆と現実原則への段階的な適応を待つ姿勢が，被受容感を高めている。保健室では養護教諭との関係性が居心地を左右していることからも，特に再登校の初期段階ではリレーションを保つことが重要になると考える。

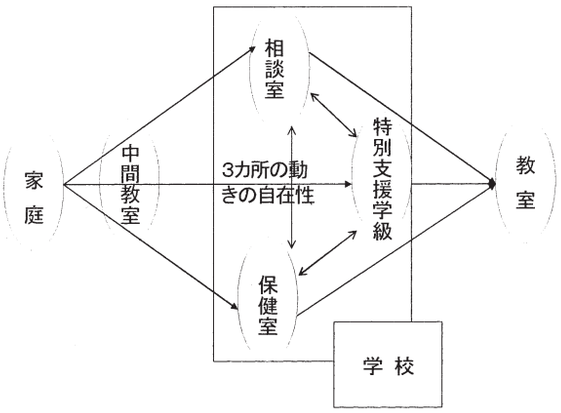

図１　３カ所の位置づけ

次に，他の生徒との関係性から居場所を見ると，保健室は人と出会う程度の接点であり「無理に仲間づくりをしなくてもいい」居場所という認識があるため，生徒同士の深い情緒的な関わりがないかわりにトラブルもない。相談室や特別支援学級になると，他者との関わりが登校を左右することもあり，関係性のトラブルも多く経験している。しかし，「中間教室（校外の適応指導教室）より仲間意識があった」というように，そこでの人間関係は，事情の似たもの同士というだけではなく，同じ学校，年齢の近さ，少人数，という条件が関わりの深さをもたらしている。トラブル解決のための教師の援助や，グループ関係がないという安全な空間の中で，互いに苦労しながらも折り合いを付けて生活体験するという役割を持っている。

《登校の目標となる活動》という側面から３カ所を考察する。田上（1999）は，特別支援学級について，生活のペースに合わせた（高校受験に縛られた授業ではなく）子どもの人生に役立つ興味の湧くような学習内容が，そこでの生活をより充実したものにする，と述べている。少人数集団の授業と日課に合わせた生活を目指したことは「勉強できることはよかった」という達成感にもなり，中学校で学級に戻ることができなくとも，高校進路に向けて数多くの利点を見いだした。茅野（2004）は学級復帰の援助の場において個別学習を中心に教師との関係を深め，各自のペースで学習が進められることの意義を示している。この傾向は相談室の生徒にもみられ，それぞれのペースで学習が計画され進められる校外の適応教室（中間教室）と学習環境が似ているため「中間教室とやっていることが同じだった」というように，学習環境を通して学校復帰の入り口となっている。学習に対するこだわりや劣等感が強い生徒が多いので，さじ加減一つで，登校の良い目的にもなれば，逆に抵抗感を高めてしまうことにもなる。相談室で個に応じた弾力性のある学習を経験し，小集団学習の特別支援学級に移行していくことは，段階的な適応を促していくものと考える。

学習以外の活動を見ると，相談室で「ゆっくりお茶，いろいろなイベント，図書館」といった活動や，３カ所でたびたび行われるレクリエーションも「囲碁で先生に勝つため，ソルティオの完成」という生徒がいるように登校の励みとなっている。楽しかったという達成感をもてる活動が，登校を継続させる大切な要因となっている。このことから，ともすると無軌道でいい加減な活動のように見えるが，その特質について十分に教職員に理解してもらう努力が必要になる。

以上より，聞き取り結果から得た３カ所が居場所となっていた理由とそこで感じた困惑，それぞれの居場所で期待される役割について図２に示した。

(2) 効率的な活用のための要件

前述したように，不登校の初期段階や人との関わりから距離をとる生徒にとって，養護教諭との情緒的な関わりが大切になってくる。それだけに養護教諭の対応の迷いや悩みをもたらすことにもなる（伊藤，2003）。また相談室においても，登校が安定してきた小集団として活動性が高まり，行動範囲や活動内容に拡がりが出てくるため，行動の自由がある分，無秩序の何でも許される遊び場となりがちである。そのため援助者側の対応の迷いが生まれ，生徒にとっても枠のない不自由さを感じるところとなる（篠田・中川，2001）。

〈 保健室 〉	〈 相談室 〉	〈特別支援学級〉
居場所となっていた理由		
①養護教諭からの被受容感（大変さの受け止め）②家と学校の中間地点 ③他者との関わりからの自由	①仲間意識 ②教師からの被受容感（個人のペースの尊重）③他の生徒との物理的な距離 静けさ	①学級への所属感，仲間意識 ②小集団の中での能力発揮 ③教師からの被受容感（個人ペースの尊重）
居場所での困惑		
①人の出入りの多さと人の目 ②養護教諭の多忙，不在 ③教室に戻る生徒への引け目，焦り	①特別な場所への抵抗感 ②他者との関わりとトラブル	①他者との関わりとトラブル ②時間の枠組み，学習への抵抗感
期待される役割		
再登校の入り口 ・養護教諭からの被受容感 ・登校目標となるレク活動	安定した物理的な場所 他者との情緒的な関わりスキル・教師からの被受容感・登校目標となるレク，個別学習	他者との情緒的な関わりスキル・教師の被受容感 学級の中での自己有能感・ゆるみをもたせた日課生活・個別集団学習

図２　３カ所の固有性と共通性

そこで上記の「登校目標となる活動」や「教師や生徒同士の情緒的な関わり」のために，援助チームを組織し，多人数の職員が関わることの必要性が出てくる。相談室に担当者をおくことで，生徒の変化が捉えやすくなり，タイミングの良い適切な援助が可能になる。しかし，校内連携を引き出すためには，そうした室担当者の立場とは異なる，連携の脇役を果たす係の存在が必要となる。つまり，別室登校の必要性を判断し，どういう環境を工夫し関わりを持つとその子の健康な部分が引き出せるか，その環境はどの居場所が適しているか，室担当者一人の判断や援助計画ではなく，客観性を持たせるためにも判断者を複数にして，時には母親も巻き込み，早期に積極的に話し合う場とそのコーディネーターの役割が重要になる。この係を中心に人的資源が検討され，時には相談室の特別時間割が組まれ，ボランティアの協力を得る学習支援などネットワークが形作られる結果となる（図 3）。

(3) 今後の課題

今回の聞き取り調査において，相談室を居場所とすることで，「学級に馴染めない自分」と思われることに強い抵抗感を持つ生徒が多いことも明らかとなった。相談室は新設された直後から三次的心理援助サービスに対応していたが，二次的心理援助サービスの生徒も時には混在していたので予想外の聞き取り結果であった。自分の大変さをわかって欲しいが，自分の弱さを知られたくはない，といった複雑な心境が渦巻いているのか，それとも鉄壁の防衛で現実適応しているので，特別な居場所がほころびを見つけられたようで警戒心が高まるのか，いずれにしても学級にいられない彼らにとっては，平静を装うということがどれだけ大事な選択であるか気づかされる。逆に，特別支援学級の居場所を経験した生徒からはそうした内容の聞き取りはなかった。その要因としては，教室不適応が長期にわたっていることや，別の居場所から特別支援学級に至る際，保護者を含めた十分な話し合いがなされることと，高校に向けた学習目的を持っていることがあるだろう。子どもが自己の存在感を実感でき，精神的に安心できる場所として誰もが認める居場所づくりの工夫を今後も続けていく必要がある。

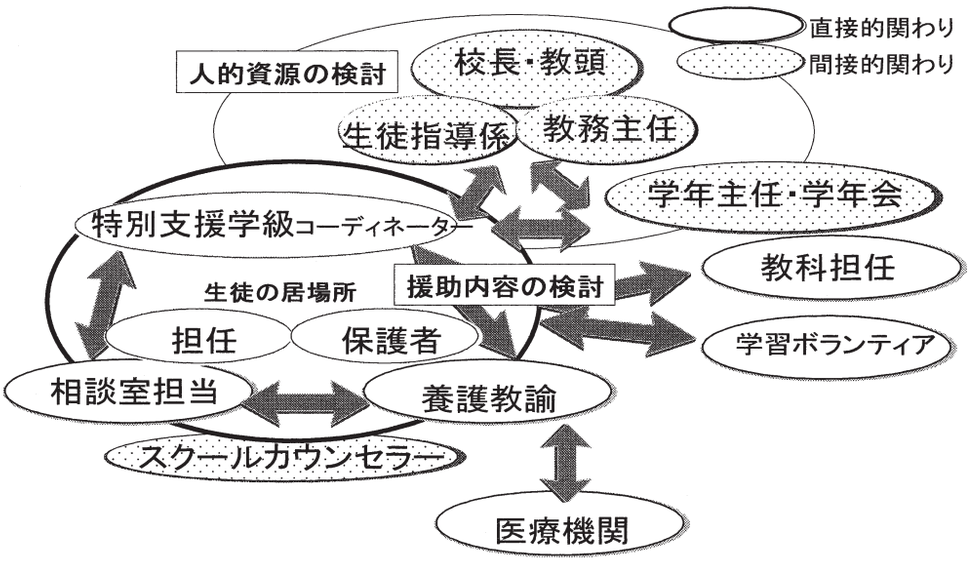

図３　生徒に関わる校内外の連携

謝辞　研究をすすめるにあたり，聞き取り調査にご協力いただいた皆様，松本市立旭町中学校元校長御子柴英文先生，現校長赤羽節夫先生をはじめ，当該中学の先生方に深く感謝申し上げます。

引用文献

茅野理恵　(2004).　中学校における不登校生徒の再登校および学級復帰へのチーム援助の実践　学校心理学研究，4，15-26.

半田一郎　(2001).　自由来室活動を通して学校生活に根ざした援助を目指す　諸富祥彦（編著）カウンセリング・テクニックを生かした新しい生徒指導のコツ　学習研究社 pp. 218-225.

石隈利紀　(1997).　学校心理学　誠信書房

伊藤美奈子　(2003).　保健室登校の実態把握ならびに養護教諭の悩みと意識　教育心理学研究，51，252-260.

国立教育政策研究所生徒指導研究センター　(2007).　生徒指導総合連携推進地域における取組状況等について－

栗谷とし子・中谷久恵・正木千恵・安達美樹　(2003).　保健室登校における不登校児童への養護教諭の関わり　島根女子短期大学紀要，41，47-54.

中島喜代子・倉田英理子　(2004).　家庭，学校，地域における子どもの居場所　三重大学教育学部研究紀要　人文社会学，55，65-77.

篠田直子・中川初子　(2001).　心の教室導入期における理解・利用状況の変化と今後の課題　学校心理学研究，1，27-35.

杉本希映・庄司一子　(2007).　子どもの「居場所」研究の動向と課題　カウンセリング研究，40，81-91.

杉浦守邦　(1992).　保健室登校の指導マニュアル－指導計画の立て方・指導の進め方－　健康教室増刊号（21）　東山書房

田上不二夫　(1999).　実践スクールカウンセリング　金子書房

田中治彦　(2001).　居場所の構想　学陽書房

（2007年12月17日　受理）